

日本のふるさと

ヴラサーコヴァー・ヴァレリエ
日本語・日本文化研修留学生 チェコ

「ふるさと」は、人が生まれ育った場所を表し、進学や就職のために移り住む場所と対比されることが多い。そこは自分が安心を感じられるところであり、離れると寂しさを感じ始めるところである。日本へ出発するとき、この対比を極めて強く感じた。私の人生は根本から変わろうとしていた。楽しみと不安の両方を感じていたが、どちらにしても、和歌山はもう私を待っていた。

チェコを出発するときは雨が降っていて、その雨のせいか、あの日の記憶は霧がかかったように今でも曖昧だ。こんな遠くまで、さらに一人で飛行機に乗ったのは初めてのことだった。ヨーロッパからは、これ以上遠い国はないのではないかと思うほどだった。機内では一時間ほどしか眠れなかった。到着したあと、初めて日本の空気を吸い込んだとき、実家で慣れていたものよりもずっと濃く、重く感じた。タクシーの中では、運転手が本当の関西弁で話しかけてきた。多分疲れのせいで、思わずチェコ語で返事をしようとしてしまった。自分が本当に日本にいるということが、まだ信じられなかった。

学生寮に到着したとき、私は多くの好奇の目にさらされた。気温が二十度もあるなか、大きな荷物と冬用の上着を手に、驚きと疲れが入り混じったまま立ち尽くしていたからだ。しかし、翌朝一番に私を迎えてくれたのは、周りの驚きを上回るほどの、さらなる驚きだった。窓から見える、きらきらと光る海。海のない内陸国で育った私にとって、一生忘れることのない景色だった。「本当にこれから毎日、海を見られるのだろうか。まるで夢のようだ。」と思った。その日の夕方、さらに二つの嬉しい驚きが待っていた。荷物を解いていると、開けていたバルコニーのドア越しに、聞き覚えのあるメロディーが聞こえてきた。町内放送から流れてきたのは、チェコの作曲家アントニン・ドヴォルザークの交響曲、通称「新世界より」だった。それに加えて、和歌山の夕日はこれまでに見たことがないほど美しかった。当時、海と夕日、広がる街を眺めながら、あの親しみ深いチェコのメロディーを聴いたとき、私は「ここは本当に、私の『新世界』なのだ」と思った。この曲は和歌山にいる間、ずっと私のそばにあった。毎晩の私の子守り唄であり、津波警報が発令された午前中ずっとサイレンが聞こえていたときでさえ、警報の合間にスピーカーから流れてきたこの曲が、私を安心させてくれた。

和歌山の第一印象は、私にとって日本全体の第一印象でもあった。可愛い四角い車、広い庭を持たず互いに近くに建てられた家々、時間通りに来る電車そしてそこに溢れる人。しかし、和歌山の本当の美しさはその人にあるのだと、私はすぐに気がついた。他の場所に留学した友人たちの経験とは少し異なり、私はここで、信じられないほどのおもてなしと温かさしか経験していない。何かを口にすれば、すぐに手伝おうとしてくれる人々の列ができた。例えば、伝統的な舞踊を体験したい、あるいは三味線を弾いてみたいと言え、いつも誰かがレッスンを探してくれた。

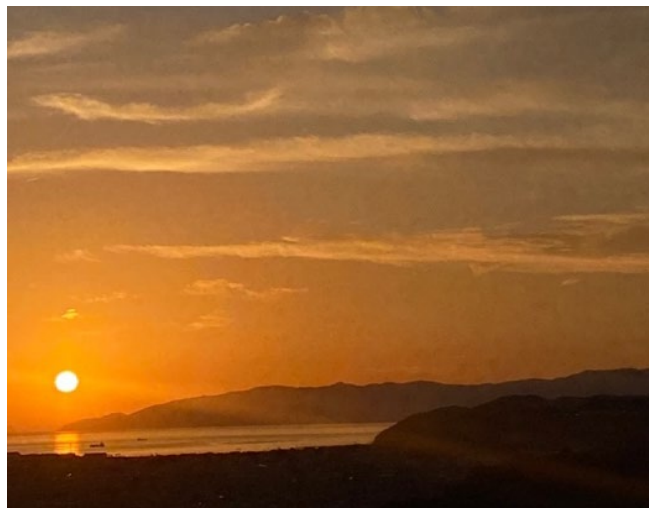
それに加えて、和歌山の人々はどこまでも辛抱強い。日本舞踊の先生は、私が何度やってもうまくできない着物の畳み方を、根気強く何度も手伝ってくれた。私自身が自分に腹を立てていたときでも、先生はいつも優しく、笑顔でいてくれた。また、夜遅くに熊野古道で嵐に遭って立ち往生したとき、夜遅くにもかかわらず、タクシーが山まで迎えに来てくれた。運転手さんに迷惑をかけて嫌な顔をされるのではないかと心配したが、出会った中で一番優しいおじいさんだった。私ももっと和歌山の人々のようになりたいと思う。

また、食は欠かせないものだが、私は和歌山で食べ物に恵まれた。これまでの人生で、これほど新鮮な魚を食べたことはなかったし、これからはないだろう。そして、冬の間に食べたみかんの量も、間違いなく私の人生の最高記録だ。

さらに、私は英語の教師のアシスタントとしてアルバイトを始めた。関わった子どもたちはチェコの子どもたちと驚くほどよく似ていて、仕事は大きな喜びだった。ある日の仕事からの帰り、上司が駅まで車で送ってくれたとき、こう言ってくれた。「私はこの学校の周りにコミュニティー、つまり家族を作りたいと思っている。そしてヴァリは今もその家族の一員だよ」。その言葉に、私は深く感動した。その瞬間、私は「ふるさと」とは場所ではなく、人々がもたらしてくれる「感情」なのだと理解した。和歌祭に参加したときのことを思い出すときも、同じような感じが湧き上がってくる。その雰囲気は、チェコの私のふるさとで行われる祭りと、驚くほど同じだった。周りの誰もがみんな楽しそうに見えた。そのとき私は、世界のどこにいても、笑顔を浮かべた人々は世界中でまったく同じに見えると思った。

数か月前は、未知の世界へと飛び込むことは怖かった。しかし、今ではそうしたことに心から感謝している。なぜなら、私はもう一つのふるさとを得ることができたからだ。今、寮を出るとき、受付にいるひとが笑顔で「いってらっしゃい、気をつけてね!」と言ってくれることが時々ある。そして、旅行などから帰ってきて、受付に誰もいないときでも、私は静かに自分に向かって「ただいま」とつぶやく。

チェコに戻ったとき、空気はどのように感じられるのだろうか、和歌山の海の空気がどれほど恋しくなるのだろうか最近よく考えている。確かなことが一つある。どこにいても、私の心の一部はいつも和歌山に残り続けると思う。そして、その一部をここに置いておくことを、私は嬉しく思っている。



Japonské rodné město

Valerie Vlasáková

Studentka programu japonských studií, Česko

Tato esej je osobní reflexí mého dosavadního studijního pobytu v japonské Wakajamě. Na začátku popisuji prvotní strach z cesty do neznáma a líčím také své první dojmy po příjezdu. To bylo například specifické rozložení japonských měst nebo první pohled na moře z mého ubytování, které jako někdo, kdo pochází z vnitrozemské země, považuji za velmi vzácné. Velmi emotivní chvílí pro mě také bylo zjištění, že z místního rozhlasu hrají Novosvětskou symfonii od Antonína Dvořáka, což mě v těžkých chvílích, jako byl například poplach kvůli tsunami, uklidňovalo.

Hlavním tématem textu je však vřelost, trpělivost a pohostinnost místních obyvatel. Ať už šlo o moji učitelku tradičního tance, která se mnou měla nekonečnou trpělivost při skládání kimona, laskavého taxikáře, který nás zachránil v bouřce na stezce Kumano Kodó, nadřízenou v práci, která mě vřele přijala jako součást její komunity, nebo třeba radostná atmosféra na místním festivalu, kterého jsem se měla možnost zúčastnit. Všechny tyto zkušenosti mě dovedly k názoru, že „furusato“ (rodný kraj/domov) není jen místo, ale především pocit sounáležitosti s druhými. Eсей uzavírám se slovy, že i po návratu do Česka zůstane kus mě navždy ve Wakajamě, jako na místě, kde se cítím doma.